

短期日本人留学生のソーシャルサポート・ネットワークの構造に関する定性的研究

高濱 愛・西村 佳恵・田中 共子

【要 旨】

本稿では、有形無形の対人的支援を意味する、ソーシャルサポートの概念に着目して、留学生に対して留学中に提供された他者からの援助について、実証的な解明を試みた。ソーシャルサポート・ネットワークとは、ソーシャルサポートの供給源となる対人関係の総称であるが、その構造については、高齢者を対象とした研究で、階層的補完モデルと課題特定モデルが対峙する。本研究では、留学生のソーシャルサポート・ネットワークの構造が、このいずれのモデルでよりよく説明されるのかを探った。アメリカなどへの約1年間の短期留学を経験した、日本人10人をインフォーマントとして非構造化面接を行い、短期留学中の交友関係、ソーシャルサポートの有無とその供給源などについて尋ねた。その結果、階層的補完型と課題特定型におよそ対応する、集約型と課題特定型のほか、新たに希薄型が見いだされた。

【キーワード】 短期日本人留学生、ソーシャルサポート・ネットワーク、集約型、課題特定型、希薄型

1. はじめに

近年、日本の大学においては学生の海外への派遣留学が積極的に展開されている。例えば、1995年に日本の国立大学（現国立大学法人）で開始された、短期留学推進制度による短期留学プログラムは、2006年現在、28校に広まり、派遣留学の拡大を示す一例となっている（文部科学省高等教育局学生支援課，2006）。しかし稲村（1980）によると、海外に滞在する様々な日本人集団について、不適応現象という観点から見ると、駐在員やその家族などに比べて留学生が最も問題の多い集団であるという。これは、留学生が異文化環境への適応のみではなく、勉強環境への適応、学業面での達成など多くの課題に直面しているためと解釈されている。日本人学生の派遣留学の充実を、量的のみならず質的にも進めていこうとするなら、彼らの留学中の適応や多様な課題の達成状況にも、留意していく必要があるだろう。その際、単身で新たな環境へ移行する留学生にとっては、周囲の他者から提供される様々な手助けが、問題の解決や課題の遂行に大きな意味を持つと思われる。本稿では、有形無形の対人的支援を意味する、ソーシャルサポートの概念に着目して、留学生に対して提供された他者からの援助について解き明かしていきたい。

2. 先行研究と本研究の目的

ソーシャルサポートは、本人が築いた対人関係網、すなわちソーシャルネットワークから得ることが期待される、有形無形の支援を指す。留学生は自国で築き上げてきたソーシャ

ルネットワークを離れ、異文化圏内で新たな対人関係を構築する立場にある。対人関係の形成とそこからのソーシャルサポートの獲得は、環境移行に伴うストレスの緩衝効果をもたらすことが期待されているが、さらに学業面でも補助を必要とすることが多い留学生にとっては、学業の達成にも、サポート獲得が少なからぬ影響を与えているとみられている(田中, 1998)。

サポートの供給源となるソーシャルネットワークがどのような構造を持つかについては、高齢者を対象とした研究で、興味深い2つのモデルが対峙されている。その1つ、「階層的補完モデル」(図1)では、高齢者がサポートを求める相手には、身近な家族を頂点としたサポートの序列があると考えられる(Canter, 1979)。中心的な供給源(高齢者の場合は同居家族)を想定し、それがいない場合に親族や近所の人など、次第に縁の遠い者に供給が代替されていくとみる。これに対し、「課題特定モデル」(図2)では、各種のサポートの特徴に合わせて、供給源は異なってくると考える(Litwak, 1985)。近所の人や友人は、同居家族の単なる補完役ではなく、別種のサポートを供給する、独自の意味を持つ存在とみなされる。

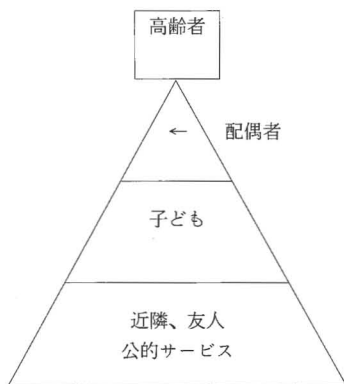


図1. 高齢者に関する階層的補完モデル

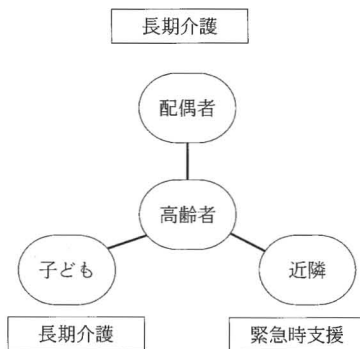


図2. 高齢者に関する課題特定モデル

日本における高齢者やその介護者に関する実証的研究の結果では、両モデルが折衷的に組み合わせられてサポートを説明する、という解釈が唱えられている(田中・兵藤・田中, 2002; 野邊, 2007)。では留学生の場合は、そのサポートネットワークの構造において、中核的なサポート供給者が想定されるのだろうか。それとも機能的に特化された供給源が、特徴的なサポートを供給して、サポート供給の機能的な分化を示すのだろうか。つまりサポート供給は集中、分散のいずれのモデルによって説明されるのかという、リサーチクエストションが考えられよう。

留学生のソーシャルネットワークの構造を探究した従来の研究には、例えばBochner, McLeod, and Lin (1977) が、ハワイ大学の留学生に対して行った研究がある。そこでは友人の「出身地域」ごとに、友人の機能が分化しているという仮説が検証された。この「友人機能の分化仮説」は、留学生のソーシャルサポート・ネットワークにおける課題特定性を示唆する。しかしBochnerらの研究は、広域の質問紙調査を通じて概略を把握する量的研究であったため、滞在者の個人レベルでの機能分化の詳細は、必ずしも明らかではない。また留学生のソーシャルサポート・ネットワークにおいて、階層的補完性を直接検討したものはまだみられない。本研究では質的手法を用いて、留学生のソーシャルネットワークが課題特定性と階層的補完性のいずれによって、よく説明されるのかを詳細に探っていこうと考えた。

3. 研究方法

3.1 調査方法と調査時期

インフォーマント一人当たり、約1時間の非構造化面接を行った。彼らは、自らも短期留学経験者である第二著者の、知人やそのまた知人である。調査の趣旨を聞いて、無償で協力依頼に応じてくれた。学術的な目的の調査であり、プライバシーは守られることを説明した。インタビューは2006年8月から12月にかけて実施され、落ち着いた話のできる場所で一対一で話を聞いた。対話はインフォーマントの同意を得て録音し、後に逐語録を作成して分析に用いた。調査時点では全員が、約1年間の短期交換留学から帰国して10ヶ月以内であり、再び日本の大学に学部生や大学院生として在学していた。

3.2 調査対象

インフォーマントは、アメリカなどへの約1年間の短期留学を経験した、20代前半の男女10人である(表1)。インフォーマントJのみ大学院生で、他は学部生である。インタビューでは、1年間の短期留学中の出来事について語ってもらった。主な質問内容は、①短期留学中のエピソード、②交友関係、③サポートの有無とその供給源、④留学生活に関する感想の4点とし、これらをめぐって自由に語りを展開してもらった。交友関係については、記入用紙を用いながら、留学中にインフォーマントが親しくしていた人を具体的に挙げてもらい、そして「個人的なことで頼りにしていた人」をサポート源とみなして、その人との関わりについて詳しく聞いていった。

表1. 調査対象者の概略

インフォーマント	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
性別	女	男	女	女	女	女	男	女	女	男
学籍	学部生	学部生	学部生	学部生	学部生	学部生	学部生	学部生	学部生	大学院生
年齢	22	23	20	20	22	20	23	21	21	24
滞在先	アメリカ	中国	アメリカ	アメリカ	アメリカ	アメリカ	アメリカ	アメリカ	タイ	アメリカ
過去の海外留学・滞在経験	2ヶ月の海外短期留学	なし	アメリカ6年間	アメリカ5年間	マレーシア幼少期、中国小・中高	アメリカ小・中・高	なし	なし	なし	なし

3. 3 分析方法

各々の語りの記録を読みこんだ上で、何人かに共通する内容や個人の特徴と思われる部分を書き出して、内容分析を行った。

4. 結果と考察

4. 1 インフォーマントの対人的ネットワークの構成

各インフォーマントにおける主な対人的ネットワークについて、その構成を集約した(表2)。Bochner, Hutnik, and Furnham (1985) にならい、ネットワークメンバーの出身地域については、インフォーマントと同国(すなわち日本)、ホスト国、他国を区別することにした。ただし現地におけるネットワークのうち、大学のシステムやその関係者は、制度に付随する所与の資源であり、学務など特定の機能が想定される独特の存在であるため、ホスト国の一般の人と分離し、これら2種に日本人、他国出身者の2種を加えた、計4種類のカテゴリーで分類した。

表2. インフォーマントの主な対人的ネットワークの構造

ネットワークの存在する地域		I. 現地				II. 日本
ネットワーク構成員の4分類カテゴリー		①ホスト国の人	②日本人	③他国出身者	④大学のシステム	
インフォーマント	A	1) 彼氏 2) クラスメイト 3) クラスメイト 4) ルームメイト	5) クラスメイト 6) 同じ大学からの留学生	7) ルームメイト	8) アルバイトの学生 9) 作文指導室	10) 友人 11) 母親
	B	1) 親友(学生仲間) 2) 家庭教師	3) 留学生仲間	4) 友人 5) 友人	6) 留学生課	—
	C	1) クラスメイト 2) ホストファミリー	3) 同じ大学からの留学生 4) 友人の母の知り合い 5) 友人	6) クラスメイト 7) クラスメイト	8) 留学生課 9) 教授	10) 母親(家族)
	D	1) 友人	2) 同じ大学からの留学生	3) ルームメイト	4) 留学コーディネーター	5) クラスメイト 6) 母親
	E	1) ルームメイト 2) ホストファミリー	3) 同じ大学からの留学生	4) カンパセーションパートナー	5) 留学生用サークル	6) 母親
	F	1) 友人 2) ルームメイト	3) 友人	4) 友人	5) コーディネーター	6) 彼氏 7) 母親
	G	1) 友人	2) 同じ大学からの留学生 3) 他大学からの留学生	—	—	—
	H	1) クラスメイト	2) 同じ大学からの留学生 3) ルームメイト	4) クラスメイト	5) 教授 6) チューター	7) 友人
	I	1) 彼氏 2) 日本留学経験者	3) 同じ大学からの留学生 4) ルームメイト 5) 日本人留学生	6) 知り合い	—	7) 友人
	J	1) クラスメイト 2) 友人	3) 同じ大学からの留学生 4) 寮の日本人	5) 寮の外国人	—	6) 友人 7) 母親

1) 2)・・・は、各インフォーマントが挙げた、個々のネットワーク構成員に付した、便宜的な通し番号である。それぞれ、本人からみたとき、どのような関係や存在であるかを、簡潔に記した。

4. 2 個別の対人的ネットワーク

インフォーマンごとに個別の対人的ネットワークを分析するにあたっては、ネットワークから得られたソーシャルサポートの分類として、和田（1992, p386）に基づく以下の5つを想定した。

- ①情緒的サポート：信頼、共感、愛などが与えられること。
- ②所属的サポート：レジャーや余暇活動に他者と一緒時間を費やすこと。
- ③情動的サポート：問題になっていることを理解してくれたり、アドバイスを与えてくれること。
- ④評価的サポート：自分が尊重され、受容されているという情報をもたらしてくれること。
- ⑤道具的サポート：仕事を手伝ってくれたり、金銭的・物質的援助をしてくれたり、必要なサービスを提供してくれること。

この分類に即してみても、ソーシャルサポート・ネットワークの利用の仕方に関して、集約型と課題特定型と希薄型の、3パターンが見いだされた（表3）。

表3. ネットワークの分類

パターン	インフォーマント
集約型	A, I
課題特定型	B, E, F, H
希薄型	C, D, G, J

以下に、各型について、該当すると思われるインフォーマントの語りを引用しながら述べる。語りの中で、特に明確にサポート内容を示していると思われた箇所には下線を付した。「」で示した部分は、インフォーマントの言葉である。語りの引用中で（ ）内に記したことは、筆者による補足である。ネットワーク構成員については、表1の記号を用いて示し、続く（ ）で適宜サポーターとしての性質を記した。語りの後には、「…」に続けて、適宜サポートの種類として判断されたカテゴリを付した。なお記載にあたっては、プライバシー保護のため、語りの趣旨を損なわない範囲で、一部に省略やわずかな改変を加えて示した。

(1) 集約型：インフォーマントA、I

インフォーマントA、Iの2名に関しては、ネットワークメンバー内に親密度の異なる人々からなる、階層構造が見られた。両名とも、最も親密なメンバー1名が、主たるサポートの供給源として様々な場面で活用されており、すなわち集約的なサポーターとなっていたことから、集約型と名付けた。

まずAさんの場合、最も親しい異性の友人（ホスト国の人）が、主たるサポート供給源になっていた。この「彼氏」は、Aさんにとって「いつも味方でいてくれる」人であったといい、いわば疑似家族的な存在だったようである。Aさん自身、異文化適応の面では、この人物の果たした役割が大きいと認識しており、留学生活は「充実していた」と語って

いる。

インフォーマントA

< I①1) ・「彼氏」 >

「卒論の調査とかもN(彼氏の名前)に全部電話とかかけてもらってやってもらったりとか、何か不便があれば全部当たり前のようにやってくれるし。もうね、いい人なんだよね…もうね、便利屋さんみたいなね。」…道具的・情動的サポート

「自分が何を言ってるか理解してくれたりとか、私が理解できるように伝えてくれようとしてくれたりとか。なんかもうそういう態度が結構、それだけで。」…評価的・情緒的サポート

同じく集約型と考えられたIさんも、「彼氏」(ホスト国の人)が主たるサポートの獲得先となっていた。留学当初は、同じ大学から留学してきた同性のルームメイトが、この集約サポーターに準じた存在であった。しかしその後は、現地の環境にもすぐに慣れて、留学生活を楽しんでいたという。

インフォーマントI

< I①1) ・「彼氏」 >

「彼氏とはなるべく〇〇語で話すようにしてて。一応向こう日本語も勉強してたから、向こうが〇〇語教えてくれて、私は日本語時々教えたりとかしあってましたね。」…道具的・所屬的サポート

「観光客の知らない場所とかにも連れて行ってくれたし。いろいろ買い物とかにも連れて行ってきて。穴場みたいなところとかにも。」…所屬的・情動的・道具的サポート

つまり、AさんとIさんのネットワークの特徴として、サポートに関する語りに集約サポーターである「彼氏」の話が多くみられ、そこに支援源が集中していることを挙げられよう。なおAさんには、家族的な保護が読みとれるが、Iさんの場合は、語学に関するサポートに授受関係がみられ、一方的な被支援の関係ではなく、より互恵性が感じられる。

(2) 課題特定型：インフォーマントB、E、F、H

インフォーマントB、E、F、Hの4名は、ネットワークメンバーの中から、サポートの供給に関する利用可能性を鑑みて最適なメンバーを選択する傾向がみられた。課題とサポート源のマッチングがみられることから、彼らを課題特定型と名付けた。さらに、ネットワークメンバーの間で、出身文化圏の類似度によって、サポート機能が特定されていく傾向も見られた。例えば、勉強や言語のサポートはホスト国の友人や、留学先大学のチューター制度等から受ける。日本人とは料理を作るなどの活動を通じて、同一文化の共有をはかる。

各インフォーマントの対人的ネットワークの詳細は興味深いが、ネットワークメンバーの種類が豊富なため、全ての対人関係を掲載することは困難である。以下では、特に特徴をよく反映していると思われたネットワークメンバーに焦点を当てて記す。

まずBさんの場合、現地学生、他の外国人、日本人と交友関係を築いたが、ネットワークメンバーの出身地域によって、機能を分化させていた。現地学生とは「深い」友情を築くとともに、ホームステイを経験するなど、ホスト文化の理解の機会を得ていた。日本人とは、日本での交友関係と「同質な関係」を築く一方で、語学学習のための家庭教師を雇用したり、〇〇国人学生と食事を共にしたりしていた。Bさんによれば、留学当初は「地獄だった」というほど語学面でも生活面でもつらいことが多かったが、3か月をめどに慣れ始めて、「天国のよう」な留学生生活を共有できたという。

インフォーマントB

< I ①1) ・親友 (現地学生) >

「ちょっと一時帰国したんやけど、そのとき空港まで送りにきてくれて。(中略)一緒に行ってよ。話し相手してくれてよ。で、帰る時立くわけよ(後略)。『行かないで。』って『早く帰ってきて。』って。」…評価的・情緒的サポート

< I ①2) ・家庭教師 >

「どうやって予習したらいいか、それを教えてもらって。」「ほんとに勉強したいなら、家庭教師やとったほうがいかなって思って。友達とはやっぱり違うところ、細かいところまで直してくれるし。」…道具的サポート

< I ②3) ・日本人の学生 >

「日本人はまあ、それ相応の付き合いをしてたかな。その人たちと遊ぶとしたら、飯を食べに、晩ご飯を食べに行くか、もしくはボーリングをしにいくか、カラオケをしに行くか。」…所属的サポート

< I ③4) ・他の外国人の友人 >

「昼食を食べるのは絶対〇〇国人、この子たちと一緒に食べる。もう、決まってたね。」…所属的サポート

Eさんは、多くの授業を、同じ日本の大学から来た学生たちと一緒に履修していた。そのため、最も身近な彼らから多様なサポートを得ていた。その他、会話の相手となってくれる「カンパセーションパートナー」をインターネット上のサイトを通じて募集し、直接会って語学を相互に教えあって過ごしていた。Eさんは「帰国したくないと思うくらい、留学生活を楽しんでいた」という。

インフォーマントE

< I ②3) ・日本の同じ大学からの留学生 >

「やっぱり授業がすごい大変だったっていうのもあって、それでやっぱ助け合ったりとか、ペーパーとかでもなんか、なんか、『どんなこと書いてる?』とか、わかんないことがあったら教えあったりとか。なんか、そういう連携をとらざるをえない状況だったっていうか。やっぱすごい難しかったし、大変だったし。」…情動的サポート

「一緒にいてくれるだけでも心強いです。」…所属的サポート

< I ③4) ・カンパセーションパートナー >

「日本語話すことも結構多かったから、この子とは、きちんと〇〇語で。」…道具的サポート

「語学の面だけじゃなくて、普通になんかね、『一緒にバーに行こうよ』とか誘ってくれたことも何回かあったし。その子日本語勉強してたから、日本語教えてあげたりとかもしたな。」…所属的サポート

Fさんは、サポートの特徴と利用可能性を慮みて、サポートの供給源を選択していた様子がみられる。例えば情緒的サポートは日本にいた「彼氏」に、語学や勉強に関する道具的サポートは現地の友人に求めていた。「とにかく慣れるまでが大変だった」というFさんは、適応には半年かかったと認識している。

インフォーマントF

<II 6>・(日本の)「彼氏」>

インターネット上のチャットや電話を利用してやりとりしていた。留学生活の悩みや、1人暮らしの心細さを聞いてもらっていた。「親だと電話かメールだったんだ。でも、彼氏の場合は電話、メール、チャットがあったから、そっちの方が連絡取りやすいっていうものもあるし。あと親にはなんか、泣き言いえない雰囲気だったから。」…情緒的・評価的サポート

<I ③4>・友人>

一番仲良かった友人の2名を親友ととらえていた。「〇〇人と、あと□□人と△△人のハーフの子と。その2人が一番仲がよかった、結構一緒にいた。うん。一緒に遊んだりとか、ご飯食べに行ったりだとか。後期の最後の辺になって、金曜・土曜の夜とかに結構その子達も含めて、他の人たちも大勢7、8人かな、全部で。集めてなんか、ゲームナイト。」…所属的サポート

最後にHさんは、留学初期の段階では同じ大学からの日本人留学生に「結構頼っていた」。しかし、その後人間関係で「もめごととかもあった」ことを契機として、彼らと一緒に過ごす時間は減り、徐々にネットワークが現地の学生へと移行していったという。勉強についてのサポートは、留学先大学の教授から得ていた。

インフォーマントH

<I ②2>・同じ大学からの留学生>

「最初何も分からないし。だから、誰か一人が情報つかめば、それをみんなで共有してとか。(中略)手続きはもちろん、どうしたらいいとか。あと、何ていうか同じところから、アメリカに留学してっていう感じ。だから、同じ立場で一番分かってくれるっていうか。目指すものが同じだから。何かいやなことがあればその人たちに話して、結局のところは味方って感じ。」…情緒的・所属的サポート

「でも、全部ずっと一緒にいたくないっていうところはなんとなくあるかも。だって(海外に)せっかく行ってるのに、何でその人たちと一緒にいないといけないのとか。(中

略) 日本でできることをわざわざ向こうでしなくてもいいな、みたいな。」

< I①1) ・クラスメイト >

「一番仲がよかったのが、その授業で会った子で、その子はもうなんか、ずっと一緒に勉強してたりとかして。この前は日本に遊びに来たりして。言葉が私そんなにできなかったけど、なんだろう。待ってくれる。聞こえる言葉だけで私を理解しようとするんじゃないくて、言えないこととか、『こういうこと言いたい?』って。『そうそう』って。だから、ここまで仲良くなれたと思う。」…情緒的・所属的サポート

< I④5) ・教授 >

「もう分からないから、(中略) もう本当に分からなかったから、その先生に『分からない』って言いに行ったら、なんか、毎週とか週2回とか先生の部屋とかでもう、普通にずっと1時間とか2時間とか教えてくれて。」…情動的・道具的サポート

総じて、インフォーマントB、E、F、Hの4名のネットワークで特徴的であったのは、支援源の属性によって機能の分化が認められ、これらを総合して、彼らの留学生生活は支えられていたということである。

(3) 希薄型：インフォーマントC、D、G、J

インフォーマントC、D、G、Jの4名は、現地での安定的なサポートネットワークが、十分成立していたと言いはし難い。現地で十分なサポートが得られなかったり、サポート提供自体を望んでいなかったりした場合を指して、希薄型と呼ぶこととする。ただしサポートが皆無というわけではなく、何らかの形でサポートを受けてはいる。だがサポート提供は断片的であり、支援的行為のエピソードが切れ切れに語られ、いわばポイントサポーターが出てくるだけである。現地では偶発的なサポート提供が散在するのみで、情動的には旧環境から維持される遠距離のメンバーに頼っていたりする。先の二つの型では、サポートの分化や集中を可能にする関係性自体への語りがあり、供給の継続性に関わる語りが見られた。しかし希薄型では、十分効果的なサポートが身近から安定的に供給されるような、新たなネットワークを育てていないように思われる。

Cさんの場合、エピソード的なサポートは語られたが、「友達も(中略)思ったよりできづらかった」ため、サポート提供者とはたまに会うだけだったという。安定的なネットワークに組み込まれている様子はみられない。Cさんは、自分のことを理解してくれる人を望んでいたが、友達もほとんどできず、「留学中は(中略)やさしくしたいのをあんま感じたことがなかった」という。結局身近には「分かってくれる人」がいなかったため、日本にいる家族が留学中の支えになっていた、と述べていた。

「自分のこと分かってくれる人がほしかったんだと思う。で、理解して『そうだよね。』とか。でも、私に変なこと言ったり変なことしたら『だめだよ。』って言ってくれる人…。だから(留学中は)そういう人がいなかったから、周りに。」

このような状況下で、授業で課される膨大な量の課題に加えて、ホームステイ先でのトラブルも重なったため、留学生活は「一言でまとめるとつらかった」という経験であったという。ポイントサポーターとして現地在住日本人からのサポートはあったが、集約サポーターのような「何でも屋」ではなく、いつでも頼れる存在にはなってもらえなかった。Cさんから依頼するというよりも、むしろ先方からのサポートの申し出があったときに、はじめてサポート獲得が可能になるだけだった。日本の家族が、新環境にはないサポートを提供して、自分を支えていたと感じている。Cさんが得ていた断片的なサポートは、以下の通りである。

インフォーマントC

<II10>・家族>

「支えてくれたのは家族が一番大きいかな。遊びに来てくれたし、話も聞いてくれたし。もうね、ほんとに家族が来た時はバイバイするとき、『もう一緒に帰りたい。』って本当に思った。」

<I②4>・現地在住日本人（ポイントサポーター）>

友人から、現地に在住し、アメリカ人の夫を持つ日本人を紹介してもらった。「なんか、ほんとに娘のようにかわいがってくれたの、その人が。それがすごいもう、うれしかった。（メールや電話で）色々話したの、その人に…学校のこともかも。なんか、もう現地のお母さんみたいな感じだったの、私にとってね。そう。で、なんかあんまり言う人とかいなかったから、そこで結構もうガーって言って、言ったりして。」

<I③6>・〇〇国人留学生（ポイントサポーター）>

留学の最後に、インフォーマントが風邪をひいた際、緊急援助的措置として、電話をしたりおかゆを作ってくれたりした。

次に、Dさんの場合、身近なネットワークメンバーからのサポートとして認識されたものの自体が少なく、サポートに関するエピソードは何件かが語られただけだった。Dさんは留学は「もう1回は行きたくない」と述べており、留学中は「楽しいことが少なかった」と感じていた。ストレスのはけ口としては、インターネット上のチャットを利用した、遠方の日本人の友人とのやりとりが頼りであり、身近な関係からサポートが得られていたわけではなかった。同じ日本の大学から何人もの学生が留学していたが、彼らとの関わりは薄かった。日本の家族とは、国際電話で1、2週間に1回程度のやりとりをしており、これはかなり助けになっていたという。

インフォーマントD

<I②2>・同じ大学からの留学生>

「（同じ日本の大学からの留学生とは）私は、会ったらまっ、挨拶とかはしたけど、そこまで、同じ大学で戯れるってことはあんまりしなかったから。もともとなんか、行く前から私はほとんど知らない子がほとんどで、（中略）私を含め、その子たちも、あんま会わなかったしね。見かけなかったし。同じ授業もなかったし。」

<Ⅱ5>・(別の地域に留学している)日本人の友人>

「(日本の大学で)同じ学部で、他の留学先に行ってる子の中でも、日本で仲良かった子になんか、(チャットで)話したり。で、向こうももちろんそういう悩みがあるから、やっぱ環境を分かっているっていうか、そういう意味ではそういう子とやったほうが、なんか、的確なアドバイスっていうか、なんか分かってくれる感があるから。」

<Ⅱ6>・母親>

「(日本にいる母親には)たまにちょっと愚痴聞いてもらったりして。日本の様子とか、家族の様子とか聞いたりしてって感じで。なんか、日本語でそういうことを話すのが何よりの気分転換っていうか。」

Gさんは、学部の4年次に、就職活動を延期して留学していた。それを意識し、留学の成果を上げようと、勉強や語学の習得に励んでいたという。だが結果を残したいという意欲の強さから、かえって追い詰められた心境に陥った。つらさを人に打ち明けることのできない性格を自認しており、留学の前半では、次第に留学生活を楽しめなくなっていった。

「やっぱ勉強は『頑張らないと』と思ってたから、まっ、頑張ったし。(中略)後は何もしないっていうことを結構嫌がったところがあって。だから、『常に何かしらの新しい刺激に触れていよう』だとか、『新しい経験をしよう』だとか、そういう風にやってきたから、息抜くところがなくて。で、それで息が詰まっちゃった感じ。」

「俺、日本にいる時は結構、何でもこう一人でやっちゃおうとする人で、あんまり人を頼ったりとか、こう自分がまっ、つらかったりした時とかにつらいとか言うのが結構苦手な人間で。まっ、それなりに日本だったらそういう態度でも自分だけでもやってこれたけど、アメリカでもまっ、特にその姿勢が悪いとは思わなかったから。アメリカに行っても、そういう風な姿勢を続けて。(中略)だけど、まっ、やっぱりそれって自分に無理してるから、ほとんどそういうのが、ちっちゃいのがどンドン溜まってくと、やっぱりなんか辛くなって来ちゃって、で、ま、そういうのがたまりに溜まり、毎日こう楽しくなくなってきちゃった時期があってまっ3・4ヶ月が経った頃かな。前期の終わりぐらいかな。」

Gさんのネットワークには集約サポーターはおらず、各人が部分的機能しか果たさない点では、課題特定型ともいえるが、そもそもネットワークメンバーの人数が少ないいうえに、機能的にはサポートはかなり不十分である。つまり、孤独感を覚えており、分化はしている、結局サポートの絶対量が乏しかったという点で、希薄型に分類した。

留学の前半には、「あー、俺だめだな。毎日こんな気持ちよく過ごせないんじゃあ何にも意味ねーな」という思いから1ヶ月間留学先を離れて、アメリカの別の土地で過ごし、気分転換を図ったという。

なお留学の後半になると、援助をもらうことを直接意図したわけではないものの、「おはようと言ひ合える仲」の友人ができ、結果としていくばくかの援助が付随した。他の日本人留学生と一緒に時間を過ごしてみると、意外と楽しい時が持てたという。ただし、授業中に「グループでのプレゼンテーションとかはあったけど、誰かにその技術的なことに

関して助けを求めたりしたことはなかった」というように、自分から人に働きかけてサポートを得ていくような積極性はみられない。働きかけなかったことについては、「結局それが自分の首をしめていたのかもしれない」と語っている。一時的なエピソードは挙げられるものの、サポートは十分とはいえず、大きな存在感を持つサポート源も見いだせない。

インフォーマントG

< I ①1) ・友人 >

趣味の音楽や古着を通じて現地学生と親しくなり、よく一緒に買い物に出かけた。「古着とかがすごい好きで、やっぱり日ごろもそういう服装だったから、そういう風にしてると、同じ趣味を持ってるとかやっぱり寄ってくるし。音楽に関してもそうだし…一緒に買い物に行ったりしたね。語ったりとか。」…情緒的・所属的サポート

< I ②2) 3) ・他の日本の大学からの留学生 >

「(日本人留学生と) つるんでみたりとか、そういったことをし始めたら、やっぱりまあ、それはすごく楽しかったし、楽しかったし。」…所属的サポート

最後に、Jさんは、不慣れな環境下での不便さや問題等を自力で解決していくことを、「留学の一つの醍醐味」と捉えていた。そのため、生活や勉強のためのサポートを他者に求めるということはある程度あえてしていなかったという。アドバイスをくれたり、サポートしてくれたりする人がいなかったわけではないが、「できるだけやれることは自分でやりたい」という気持ちから、サポートネットワークを恒常的に利用していたわけではなかった。

「特別に『どうしてもサポートを受けなきゃ』っていうところはまあ、そんなになかったと思います。要はまあその、英語の処理能力が人より遅いというのが問題であって、(中略) 時間はかかるけど読んだら分かるし、授業でやってる内容も読んで、意味が分かれば当然分かるっていうのが当然ありましたし。そこら辺の自信っていうのは、やっぱりそこそこあったと思うんで。」

「正直そういう風に精神的に悩むぐらいのレベルの英語状態だった時にはまあ、それこそ他の人と会ったり、遊びに行ったりしてる余裕もないぐらいですから。部屋にいましたよね。」

これらのことから、インフォーマントC、D、G、Jは、現地における対人的関わりが比較的希薄であり、ポイントサポーターは認められるが、内容や場面が限られた部分的な支援が分散するのみで、安定した関係性の存在が読みとれる語りは、総じて得られない。サポートを求めてももらえないと感じていたCさん、Dさんは総じて留学を修業や忍耐、つらさといった意味合いで受け止めていた。Gさんは留学の後半になって、ネットワークメンバーが増えるにつれて留学を楽しめる時が持てるようにはなったが、関係性が希薄な前半は特に辛かったという。これらに比して、Jさんはサポートを求める語り自体が少なかった。関係性が希薄でも留学期を辛いとは言わず、留学自体は「いい経験になった」と受け止めていた。この点で、他の希薄型とは異なる面がある。

4. 3 総合考察

以上のことから、短期日本人留学生のソーシャルサポート・ネットワークの構造には、集約型、課題特定型、希薄型の3つの型が提案できよう。

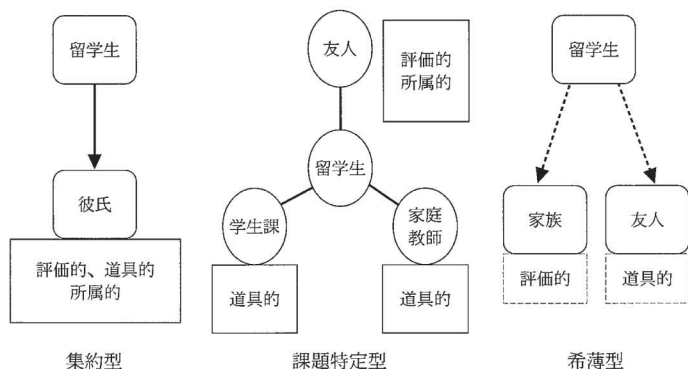


図3 日本人留学生の対人関係に見いだされた3つの型

○内はネットワーク構成員、□内は提供されるサポートの種類

本研究では、従来提唱されてきた階層的補完性と課題特定性を示唆する2つの型、すなわち集約型と課題特定型が見られた。加えて、3つ目の型として、現地で受ける対人的な支援自体が乏しい希薄型が見いだされた。いわば、新環境への移行に際して、サポート資源を獲得して活用しているのが前2者であり、集中的な特別の資源を見だし得た場合に集約型、他は課題特定型になったものと思われる。そして3つめの希薄型は、新環境への移行に伴うストレス対処や実用的な対応において、新たな関係からの対人的サポートがさほど重要な役割を果たしていなかったケースと考えられる。

希薄型には、本人がサポートの利用をあまり意図しない場合と、望みながらもうまく得られない場合が含まれる。つまり異文化環境において新たな人的資源の活用が乏しく見える時は、もともと対人関係が希薄であり活用していなかった人と、単に新しい関係を速やかに作ることが苦手という人に、下位分類できる可能性が示唆される。結果としては両者とも、異文化適応に際して、現地のサポートの活用は少ない。ただし、「現地での」「新規な」人間関係は「速やかに作れない」が、サポートは欲しているという場合には、旧環境の資源への依存が見られた。この関係を「速やかに作れない」ことが、もし滞在地の異文化性を主たる原因とするならば、異文化間ソーシャルスキルなど、文化学習の要素を取り入れた教育で関係の形成を促せるかもしれない。環境移行などの身の回りの変化自体へ

の適応力や、対人関係への積極性など、より普遍的な要素が絡む場合は、より文化一般的な心理教育が効果を持つことも考えられる。

ソーシャルサポートの利用は、従来、有形・無形に異文化適応を促進すると見られてきたが、今回は新環境でのサポートを、積極的に利用しない例や、利用したくても不十分で旧環境の資源に依存する例が見いだされた。一般にサポートはストレス緩衝の機能や問題解決への効果を持つことから、異文化滞在中にも効果的とみられてきた。しかしサポートを適応に活用するという図式に、必ずしもよらない個性を持つインフォーマントがいることがわかり、彼らの異文化滞在中の具体的な有り様が把握された。そして機能しているサポートネットワークにも、機能分化の観点から二つの型が区別された。従来の質問紙調査を中心とした手法に比べて、本研究が事例研究の手法を採ったために、個別の方略を浮かび上げさせることに繋がったといえるだろう。

サポートのパターンと適応との関係に注目すると、今回の課題特定型と集約型のインフォーマントには、留学生活に関する感想が肯定的であり、総じて適応はよかったと自認する傾向がみられる。一方希薄型では、サポートを求めても不十分だったと感じるCさんとDさんは、留学をつらい経験と捉えていた。Gさんは留学の前半の段階ではCさん・Dさんと同様であったが、後半にいたってから、サポートを徐々に得られるようになるにつれて留学を楽しめるようになった。この点ではGさんは、希薄型と課題特定型の間mediateな性質を感じさせる、過渡的な存在かも知れない。また希薄型の中でも、サポートをあまり求めず勉学に向かうJさんは、つらさも楽しさも語ることが少なかった。本研究では適応度自体は測定していないため、課題特定と集約のどちらの型が、総体としての適応に有利なのか、あるいはそれぞれがどのような適応の側面に効果的なのかといった、詳細な比較は難しい。しかし、Takahama, Nishimura and Tanaka (2008) で示唆されているように、留学生の異文化適応に、対人関係から得られるソーシャルサポートが重要な役割の一端を担っている場合があるということは、指摘できるだろう。適応の程度や質の比較は、今後の興味深い論点である。

最後に、今回の研究の限界と残された課題について述べておきたい。どの型に属するかが、留学生の個性によるものなのか状況による流動的なものなのか、あるいは時期的変化の影響を受ける現象なのかどうかについては、今回の調査からは結論できない。また、なぜその型に属するようになったのかという、ネットワークの成立過程の詳細についても明らかではない。ネットワークの成立過程自体を考えるには、縦断的な調査が必要と考えられる。縦断パラダイムを立てるなら、個人に固有のソーシャルサポート・ネットワークのスタイルが留学前から存在して、環境が変わっても固定化された作用を持つとする仮説や、逆に環境との相互作用の結果を重視する仮説を立てながら、検討を進めていくことになろう。つまりサポートから適応に至る作用機序には、本人の持つ対人的志向性や、獲得可能な資源の状況といった、個人の内的・外的要因が関わると予想される。今後は、更に事例を蓄積していくことで、これらの課題について解明していくことが待たれる。

【参考文献】

- Bochner, S., McLeod, B.M. & Lin, A. (1977) "Friendship Patterns of Overseas Students: A Functional Model", *International Journal of Psychology*. Vol. 12, No.4, pp.277-294.
- Bochner, S., Hutnik, N. & Furnham, A. (1985) "The Friendship Patterns of Overseas and Host Students in an Oxford Student Residence", *The Journal of Social Psychology*. Vol. 12, No.6, pp.689-694.
- Canter, M.H. (1979) "Neighbors and Friends: An Overlooked Resource in the Informal Support System", *Research on Aging*, Vol. 1, No.4, pp.434-463.
- 稲村博 (1980) 『日本人の海外不適応』日本放送出版協会
- Litwak, E. (1985) *Helping the Elderly: The Complementary Roles of Informal Networks and Formal Systems*, Guilford Press: New York
- 文部科学省高等教育局学生支援課 (2006) 『我が国の留学生制度の概要 受け入れ及び派遣』
- 野邊政雄 (2007) 「地方小都市に住む高齢女性の社会関係における階層的補完性」『社会心理学研究』21(2), pp.116-132.
- Takahama, A., Nishimura, Y. & Tanaka, T. (2008) "The Influence of Social Skills to Get Social Support on Adolescents during Study Abroad: A Case Study on Japanese Short-term Exchange Students", *Journal of International Student Advisors and Educators*.10, pp. 69-84.
- 田中共子 (1998) 「在日留学生の異文化適応：ソーシャルサポート・ネットワーク研究の視点から」『教育心理学年報』37, pp.143-152.
- 田中共子・兵藤好美・田中宏二 (2002) 「在宅介護者のソーシャルサポートネットワークの機能—家族・友人・近所・専門職に関する検討—」『社会心理学研究』18(1), pp.39-50.
- 和田実 (1992) 「大学新入生の心理的要因に及ぼすソーシャルサポートの影響」『教育心理学研究』40, pp.386-393.

付記

本研究の内容は、2007年10月27日に多文化関係学会第6回年次大会において発表された。

謝辞

本研究の一部は、科学研究費補助金（基盤研究(C)(2)16530403 代表者 田中共子）の助成を受けた。

A Study on the Structure of Social Support Network of Japanese Students Studying Abroad for a Short Period of Time

TAKAHAMA, Ai, NISHIMURA, Yoshie, & TANAKA, Tomoko

The aim of the paper is to positively investigate the support offered to international students by others during their study abroad, by focusing on the concept of social support, which includes both tangible and intangible human support. Social support network is a generic name for human network that supplies social support. The structure of the social support network comprises two models - hierarchical-compensatory model and task-specific model - which are facing each other. This study explored as to which of the two models explains the social support network of international students in a better manner. Ten Japanese students who have studied abroad, for example, in the United States, for about a year were selected as informants of the study; each student participated in a non-structured interview. In the interview, they were asked about their friends and acquaintances, whether or not they obtained social support, and the source of support supply. As a result, besides the intensive model and task-specific model, which correspond to the two models mentioned above, a superficial model was also discovered in this study.